

「今日の説教、聴き手のために」 2008/12/21 明治学院教会(137)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「世の光イエス」

ヨハネ福音書1章9節～14節

「すべての人を照らすまことの光があって世にきた」(9)

- 1、クリスマスの季節、キリスト教主義の幼稚園や保育園では、子供たちが聖誕劇をいたします。マリア、ヨセフ、天使、羊飼、東の博士たち、宿屋。どの役柄も子供たちは真剣に演じます。羊飼いの野宿の場面で、主の御使いが現れて、主の栄光が彼らを「巡り照らし」、彼らが恐れると「恐れるな！見よ、すべての民に与えられる大きな喜びをあなたがたに伝える。今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそキリストである」と宣言する場面は劇の中のハイライトであります。ここの「めぐり照らす」という言葉には意味深いものがあります。くまなく照らしだすという強烈な表現です。この言葉は、使徒言行録ではパウロの改心の物語に出てきます。「真昼に光が天からさしてきて、太陽よりももっと光輝いてわたしと同行者たちとをめぐり照らした」。サウロとその一行たちはみな地に倒れます。
- 2、パウロがめぐり照らされたのは、今までの生き方です。律法の実現を自分の力で成し遂げようとした、自己実現の生き方が白日の元に照らしだされたのです。私たちは、自己中心の姿が照らしだされるのを恐れます。ですから、神の強い光が巡り照らす時、恐れを抱くのです。そこを「恐れるな、救い主が御生まれになった」と逆に切り込むのがクリスマスのメッセージです。
- 3、知人の信仰者の方は、キリスト教の個人的・人生論的な救済観にきわめて批判的であるにもかかわらず、この個の在り方を「照らしだし」深く自分中心という罪・自我・自分完結という「自分の城や砦を最後に守ってしまうような生き方」を破り、破られる経験を聖書の持つ根源性として大事にされていました。かれは、みんなの幸せを実現するために、社会の変革を志向してゆく政党の運動にも熱心でしたが、その社会的生を実りあらしめるため、逆説的に実存的在り方を大切にされました。
- 4、ところがヨハネ福音書では単純に「すべての人を照らすまことの光があって世にきた」とだけ「クリスマスの出来事」を語ります。それは自分の暗部を照らしだす光を含んでいますが、ある注解者（フルトマン）が言っているように、途方もない範囲で、人間の自己理解を可能にしている光です。光は見る事を可能し、「現存在の被照性」（ちょっと難しい表現ですが）を絶えず問うものだ、と言うのです。
- 5、私は少年の時に「光に包まれた」という経験があります。山の中の星もない夜、闇に独り閉じ込められた時のことです。寒気のする恐怖に襲われました。目を閉じ、深呼吸をし、黙想で落ち着きを取り戻そうと観念しました。祈っていたのだと思います。しばらくして目を開けた時、驚いた事に、柔らかな光に包まれていました。目が慣れたと言えばそれまでなのですが、道がぼーっと微かに白く見えて、体で感じる光の体験でした。闇の怖さから、解放するような暖かい光でした。自分の存在の自己理解を包む光でした。後々、ヨハネ福音書を読んで「その光はすべての人を照らす」でその経験がよみがえってきます。だれもそこから漏れることはない光、神の愛に包まれていることを感謝し、クリスマスを迎えようではありませんか。